

2018年8月15日発行

世界情勢ブリーフィング

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/>

- エルドアン氏がトルコ大統領就任、財務相に娘婿指名（7月9日付ロイター）
<https://jp.reuters.com/article/turkey-president-idJPKBN1JZ2SY>
- トルコ、非常事態宣言を2年ぶり解除 デモ制限などの新法も準備（7月19日付AFP）
<http://www.afpbb.com/articles/-/3182963>
- 米、トルコ法相と内相に制裁 米牧師拘束で（8月2日付ロイター）
<https://jp.reuters.com/article/us-turkey-idJPKBN1KN024>
- トルコのエルドアン大統領、米閣僚2人の資産凍結を指示（8月5日付CNN）
<https://www.cnn.co.jp/world/35123572.html>
- 米大統領、トルコからのアルミ・鉄鋼関税引き上げ表明 拡大通商法に基づき（8月10日付ロイター）
<https://jp.reuters.com/article/trump-turkey-tariff-idJPKBN1KV1TN>
- トルコリラ 20%急落し最安値、米の追加関税圧迫 大統領ら発言も歯止めかからず（8月11日付ロイター）
<https://jp.reuters.com/article/turkey-currency-idJPKBN1KV29K>
- トルコ財務相、市場の懸念緩和へ行動すると表明 リラ急落を受け（8月12日付ロイター）
<https://jp.reuters.com/article/turkey-currency-albayrak-idJPKBN1KX0TB>
- トルコ大統領、金利は「搾取の道具」 低金利維持を示唆（8月12日付AFP）
<http://www.afpbb.com/articles/-/3185820>
- トルコリラ、中銀流動性供給策などで一時下落に歯止め 売り圧力なお存在（8月13日付ロイター）
<https://jp.reuters.com/article/lira-halts-downward-spiral-idJPKBN1KY23F>

「トルコ現代史（2）：エルドアンの憲法改正」（8/3）の続きです。

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=5882>

前回は、エルドアンが大統領になった後のトルコの状況と憲法改正の実現について解説しました。

今回は、憲法改正を経て名実ともに国家のトップとなったエルドアンの下、新たなる時代

を迎えるトルコの展望について解説します。

あわせて、先週から続いている米国との衝突、それによって引き起こされたトルコリラの急落と通貨危機の可能性について述べます。

トルコ現代史（3）：新たなるエルドアン時代（米国との衝突と通貨危機のリスク）

●新時代の幕開け

6月の選挙後、実権大統領制が導入されました。これによりトルコの政治システムは大きく変わりました。

具体的には、首相ポストが廃止されました。大統領は行政府の長として閣僚を任命し、大統領令や非常事態宣言を発令し、国家予算案の策定を行う権限も認められています。

また、大統領が政党に所属できるようになり、エルドアンは憲法改正が実現した後、17年5月にAKP党首に返り咲いています。さらに、憲法裁判所の判事や国内の判事・裁判官の人事権を握る高等委員会のメンバーも任命できます。

これまでエルドアンは事実上の影響力をもって大統領を超えた力をふるってきたのですが、これからは名実ともに国家のトップとして絶大な権力をふるうこととなります。こうしてエルドアンの夢は実現しました。

今後の展望ですが、エルドアンの時代は少なくとも10年続くことになるでしょう。

2年前のクーデター未遂事件から続いてきた非常事態宣言はようやく解除されることになりましたが、これに先立ち、エルドアンの大統領就任前日の7月8日、非常事態宣言に基づく政令によって警察官や軍人1万8000人を免職にしました。エルドアンの強権と権力基盤の強さがあらためて示されたといえます。

新政権の体制については、閣僚が発表されました。

注目ポイントの一つは、経済政策の司令塔である財務相にエネルギー天然資源相だったアルバイラクを起用したこと。前述のとおりアルバイラクはエルドアンの娘婿で、経済運営

経験がほとんどなく、露骨な情実人事とみられています。

エルドアンは選挙前から金融政策に介入する意向を示しており、傀儡であるアルバイラクを通じてその影響力を行使するでしょう。これに加え、市場からの信頼があつかったシムシェキ前経済担当副首相が入閣しなかったことで、トルコリラは急落しました。

金融政策については、中銀総裁の 5 年の任期が廃止されたこと、副総裁の就任条件の一つである「最低 10 年間の業務経験」が削除されたことも懸念材料になっています。

なお、アルバイラクはエルドアンの有力な後継者候補とみられています。大統領の娘婿で、ビジネス界から突然に政府の要職に就いたことから、「ジャレッド・エルドアン」と揶揄されています。

かつて AKP はタレント集団でした。エルドアンとギュルという二巨頭がいて、アルンチとチチェックがこれを支える・・・経済と外交はババジャンとダウトオールというプロが見る・・・エルドアンに直言できたこれらの古参幹部はいなくなり、身内とイエスマンで固められるようになっています。

●米国との衝突

トルコは、経済・内政のみならず、クルド、「イスラム国」、イラク、シリア、サウジ、ロシア、欧米との外交関係においても課題が山積しています。

以下の記事で述べたとおり、AKP 政権は、自身の成功体験によって自信をつけたこともあり、ダウトオールの主導の下、積極的な全方位外交を展開しましたが、世界情勢の激動に対応できず、状況は複雑化しました。

・「トルコの『ゼロ・プロブレム外交』の挫折」(15/6/18)

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=655>

特にイスラム諸国に対する独自外交は米国との関係を複雑化させました。

両国は NATO 同盟国であるにもかかわらず、イラン（米国は強硬、トルコは融和）、エジプト（シシ政権に米国は融和、トルコは強硬）、シリア（アサド政権に米国は中途半端、トルコは強硬）、「イスラム国」（米国は強硬、トルコは消極）、クルド（米国は協力、トルコは攻撃）といった様々なフロントで不一致が生じています。

近年、両国の関係はさらに悪化していますが、その最大の要因はこれまで解説してきたとおり、ギュレン師とクルドです。

- ・「米・トルコのビザ発給停止」(17/10/19)

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=4521>

- ・「米・トルコ外相会談とクルド軍の撤退」(6/11)

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=5635>

クルドについては、6月の選挙の結果、AKPと連立を組む極右政党MHPの発言力が強まったことが影響すると予想されます。MHPはクルド排撃を主張しており、それは米軍と協力関係にあるシリアのクルドへの攻勢の強化につながる可能性があるからです。

●通貨危機は起きるのか

そして先月、両国の衝突はさらに激化します。

トルコが米国人牧師ブランソン氏を拘束したことをトランプ大統領が猛烈に批判。トルコ閣僚の米国内資産を凍結します。さらに先週、すでに発動していた鉄鋼・アルミの追加関税を2倍に引き上げる措置に及びました。

- ・「トルコの政策金利の据え置き」(7/30)

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=5844>

- ・「今週の動き(8/6~12)」(8/6)

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=5895>

米国の措置が発表されると、トルコリラは対米ドルで一時約2割(前日比)下落して最安値を更新。年初来の下げ率は4割に達しました。

トルコは足元でインフレが16%近くに高進し、経常赤字もGDP比6%に拡大していました。マクロ経済的にも不安が生じていたところですが、にもかかわらず金融引き締めへ転じることをエルドアンが阻止していたことが不安に拍車をかけました。

- ・「トルコの政策金利の据え置き」(7/30)

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=5844>

- ・「今週の動き(8/6~12)」(8/6)

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=5895>

リラは今週に入っても下げは止まらず、連日最安値を更新。

中銀がリラ建ての預金準備率を引き下げるなど流動性供給策を発表し、アルバイラク財務相が「行動計画」を策定するなど緊急対応策を講じたことで、ある程度の歯止めがかかりました。

しかし、エルドアンは利上げに対して否定的な発言を連発。ブランソン氏の解放にも応じない姿勢を示しています。

エルドアンの金融政策の介入はババジャンら AKP を支えてきた重鎮がいれば阻止されたかもしれません。娘婿のアルバイラクにその役割は期待できず、市場もそのように評価します。対米関係も同様です。懸念要因は残ったままで、今のトルコの対応は小手先と言わざるを得ません。

ブランソン氏が解放されなければ米国はさらなる制裁を発動するでしょう。金融政策も現状のまま緩和姿勢が続けば、通貨危機に陥る可能性は否定できません。まさにエルドアンが「裸の王様」になっていることが大きなリスクになっています。

今後の展開ですが、状況は流動的で日々変化しており、現時点で確たることは言えません。

しかし、私個人の見通しを述べれば、近い将来、エルドアンが譲歩し、部分的にせよ米国と何らかの合意を結び、緊急利上げも認めるのではないかと予想します。

なぜなら、そうした判断を下さなければ、通貨危機が起こる可能性が非常に高いからです。エルドアンにとって最大の関心事は 19 年 3 月に予定される地方選挙です。それまでには何としても危機の発生は回避したいはずです。

米国との関係改善と利上げ以外に取り得る選択肢は IMF 支援と資本規制です。しかし、いずれもエルドアンにとっては受け入れ難いものです。

トルコは 00 年と 01 年に金融危機に見舞われましたが、このとき IMF 支援を受け入れ、その管理下に入りました。以下の記事で述べたとおり、当時「瀕死の病人」と言われたトルコの救済を掲げて支持を得たのがエルドアンです。

・「トルコ現代史（1）：アタテュルクとエルドアン」（7/20）

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=5784>

その後発展を遂げたトルコはIMFの債務を13年に完済しました。IMFからトルコを解放したことはエルドアンにとって誇るべき功績です。それを傷つけることは耐え難い屈辱でしょう。資本規制も、大幅な経常赤字を抱えるトルコが取り得る手段ではなく、IMF支援の方がまだ現実的です。

エルドアンの国内基盤は盤石であり、米国への歩み寄りと金融政策の転換がエルドアンの求心力を低下させるおそれはありません。米国もエルドアンが譲歩すればメンツを立てるよう配慮するでしょう。トランプとエルドアンは相変わらず激しい言葉でお互いを非難していますが、事務レベルでは両国は落としどころを探るべく交渉を続けています。

次のトルコ中銀の金融政策決定会合は9月13日ですが、やろうと思えば今月中でも緊急会合を開いて利上げを実施するでしょう。

しかし、エルドアンの行動はトランプと同じように読めない（苦笑）、これら二つの措置よりもIMF支援を選ぶかもしれません。その場合、IMFと交渉して、融資を受けることなく、市場の信頼性回復に向けた措置だけを受け入れるのではないかと思います。こうすれば「監視下」に入ることなく、「IMFの支持を得た」と市場にアピールできるからです。トルコの財政能力からすればこれは可能です。

以上いずれかの対応をとれば通貨危機を回避することは可能と思います。もっとも、エルドアンの体制が続く限り、米国との関係と金融政策の不確実性のリスクは残ります。

エルドアンの体制は今後10年は続きます。これを織り込んで考えると、通貨危機を回避すればすぐにリラが大きく上昇する・・・とは考えにくいところです。

●トルコ経済の成長力

一方、エルドアンの統治によってトルコ経済が強化されたのは事実です。

経済・内政面のみならず、外交面でも強権的・反欧米的な色彩を強めるエルドアンを「トルコのプーチン」と呼ぶ人もいますが、プーチンと異なるのは、真の意味でトルコの経済を強化し、市民の生活レベルを向上させ、今なお中間層を含め幅広い層から支持を得ている点です。

かなり無理やりながら選挙で勝利を続けているのも、やはり「エルドアンのないトルコは想像できない」という感覚が市民に共有されているのでしょう。

トルコは中東・北アフリカ地域で最大規模の経済力があり、人口ボーナス期もこれから 20 年続く上、エルドアンの時代を経て新興国の中でも工業化が進み、民間企業も強く、高いポテンシャルを有しています。優良党のアクシェネルなどエルドアンを脅かすほどの強力な政治家も育っています。

10 年、15 年の長いスパンで見れば、中東はもちろん世界的にも大きな影響力を有する主要国の一角を担うことになるでしょう。その意味で非常に有望な新興国です。ただ、しばらく時間が必要と思います。

●欧州との関係

最後に、欧州と日本との関係について述べておきます。

欧州との関係については、トルコは EU 加盟交渉を続けていますが、EU はエルドアンの強権を批判し続けており、新政権の発足によって交渉はさらに難しくなると予想されます。

もともと、トルコは既に EU の関税同盟に加盟しており、これ以上の自由化（人の移動など）を求める必要はないという見方が有力です。しかも、加盟交渉を続ける間、トルコは EU から支援金を受け取ることができます。したがって、トルコとしては今の状態を続けることが最善であり、本気で加盟する気はもはやないようです。

この数年間でロシア、イランとの関係が強化されていますが、これも欧米を懐疑的にさせています。

・「ロシア・トルコ・イランの三国連携」（16/9/2）

<http://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=2571>

●日本との関係

日本との関係ですが、トルコの人々は極めて親日的です。日本と縁がなく、ほとんど知識がない人すら「日本は大好き」と言ってくれます。これは私自身、90 年代に旅行したときに各所で感じました。

この理由は、有名ですが、エルトゥールル号事件（明治時代、和歌山県沖でオスマン帝国の軍艦が遭難した事件で、地域の住民が救助した）と日露戦争（オスマン帝国を苦しめたロシアをアジアの日本が破ったことにトルコ人は感銘を受け、東郷平八郎フィーバーが起きた）です。

イラン・イラク戦争のとき、イランに駐在していた日本人が直行便がなく脱出困難になったところ、トルコ航空は自国民より日本人を優先して航空機に搭乗させました。この決断の背景にはエルトゥールル号事件のとき日本に助けてもらったという感謝の念があったと言われています。

このエピソードは、2015年公開の日・トルコ初の合作映画『海難 1890』で取り上げられました。

トルコの映画？と思われるかもしれませんが、実はトルコのエンターテインメント（ポップカルチャー）のレベルは極めて高く、中東ではトルコの映画、ドラマ、音楽が圧倒的な人気を誇り、世界的にも注目されるようになっています。

■ トルコを代表するポップ歌手タルカンの98年のヒット曲「Simarik」

<https://www.youtube.com/watch?v=2yVdUKQs0zY>

あとがき

私がトルコを訪問したのは90年代後半。このときはイランのタブリーズから陸路で入国し、ドゥバヤジット（国境の町、アララト山が見える）、カッパドキア、パムッカレ、アンカラ、イスタンブールを回りました。

トルコはご飯がおいしく、インド、パキスタン、イランを経てたどりついた私にとっては天国のようなところでした。安い食堂（ロカンタ）に行くと多種多様な料理を食べることができ、しかも驚くべきことにパンが食べ放題（大抵タッパーのようなものに詰め込まれてテーブルに置かれている）。このパンがまたとてもおいしい。バックパッカーには大変ありがたいサービスでした。

チャイ（ストレートティー）もおいしい。エルマ・チャイ（アップルティー）が有名です

が、これもカラフルに色々な種類があります。

ちなみに私は東から西に各国を移動する中で、国民的飲料の変化に気づきました。中国では中国茶、チベットではバター茶、ネパール・インド・パキスタンではミルクティー（甘い）、イランではストレートティー（角砂糖をかじりながら飲む）、そしてトルコではカラフルなストレートティー（角砂糖は好みで入れる）。

また中東に入るとコーヒーの文化も加わります（アラビックコーヒーとターキッシュコーヒー）。食事の話は尽きないですね（笑）。このへんの大陸横断旅行の話は、また機会があるときに書きたいと思います。

脱線しましたが、トルコに戻ると、エルドアン時代に入る前で、経済発展もまだまだでした。それでもイスタンブールは活気にあふれ、街も生活、欧州の香りも感じ、まさに東西文明の結節点という魅力に満ちていました。ガラタ橋の近くで食べたサバサンドとムール貝が絶品でした。また食べ物ですが（笑）。

もう 20 年前なので、イスタンブールも他の都市も大きく変わっているでしょう。近いうちに現地に行って、今の姿をこの目で見たいものです。

【発行】 The Gucci Post

(Copyright 2018 グッチーポスト株式会社)

【世界情勢ブリーフィング HP】 <http://guccipost.co.jp/blog/jd/>

【バックナンバー】 <http://guccipost.co.jp/blog/guccipost/?p=395>

【グッチーポスト HP】 <http://guccipost.co.jp/blog/>

【編集部 Facebook】 <https://www.facebook.com/GucciPost/>

【編集部 twitter】 https://twitter.com/gucci_post

【お問い合わせ】 inquire@guccipost.co.jp

【内容についての質問・コメント】 jd.world.briefing@gmail.com

※本メルマガの内容は、筆者 JD の個人的な見解であり、グッチーポスト株式会社含めいかなる組織またはグッチー編集長含め他のいかなる個人の見解を代表ないし代理するものではなく、他の個人または組織がその内容に対して責任を負うことはありません。